

木村 秋湖（きむら・しゅうこ）

1、プロフィール

青森県俳句懇話会専務理事兼事務局長、俳誌「はまなす」編集顧問、青森県俳句懇話会会長、俳誌「花桐」代表等を務める。句風は客観写生を基本に据え、伝統を重んじる詠風。

<生没>

1932(昭和 7)年 12 月 16 日 ～ 2025(令和 7)年 3 月 26 日

<代表作>

木造は新田の臍梅雨晴るる
追憶の妻と過せし汗の日日
水打ちて人恋ふ夜のはじまりぬ
曳家待つ弘前城の花吹雪
しばらくは日溜りを飛び秋の蝶

<青森との関わり>

五所川原市生まれ。増田手古奈に師事。青森県俳句懇話会県句集編纂に関わる。同会会長として県俳壇を牽引。

2、作家解説

1932(昭和 7)年、五所川原市梅田に生まれる。本名は忠博。1951(昭和 26)年、五所川原農林高校林業科卒。青森県森林組合連合会に勤務、参事で定年退職。俳句は 1957(昭和 32)年俳誌「十和田」に入会、増田手古奈に師事。第 1 回十和田賞受賞。新居を構えた思い出の句〈小さき部屋小さき炉小さき生活かな〉。1988(昭和 63)年、俳人協会会員となる。

1990(平成 2)年、日本伝統俳句協会会員となる。同年から青森市俳句連盟常任理事を 16 年間、2006(平成 18)年から 19 年間会長を務める。1994(平成 6)年から俳誌「花林檎」(主宰・村上三良)の編集委員を、終刊まで 9 年間務める。

2000(平成 12)年から東奥日報社主催の青森県俳句大会兼題選者を 14 年間委嘱され、2014(平成 26)年からは席題選者を委嘱される。2016(平成 28)年、東奥日報社から長年にわたり青森県俳句大会発展に寄与したとして感謝状を受ける。

2001(平成 13)年から青森県俳句懇話会専務理事兼事務局長を 10 年間、2015(平成 27)年から副会長を 2 年間、2017(平成 29)年から 2023(令和 4)年まで 6 年間、会長を務める。青森県俳句懇話会創立 50 周年記念大会において、永年勤続役員として感謝状を受ける。

2001(平成 13)年から日本伝統俳句協会東北支部運営委員を 13 年間務める。また、同年から俳人協会青森県支部幹事を務め、2017(平成 29)年からは顧問となる。2004(平成 16)年から俳誌「はまなす」編集顧問を、終刊まで 17 年間務める。2004(平成 16)年から青森市総合福祉センター趣味講座(俳句)講師を、2006(平成 18)年からRAB学苑俳句講座講師を務める。〈初花を見し初蝶を遠く見し〉〈存分に風の遊べるつつじかな〉などを詠む。2015(平成 27)年、青森市長から俳句の後進の育成及び文化の普及発展に寄与したとして感謝状を受ける。

数々の役職をこなし、県俳壇の頂点に立つ秋湖は軸足を青森に置き、他の追従を許さない活躍を見せた。また、講師として後進の指導にあたるなどのほか、自ら伝統俳句の精神を受継ぎ、俳誌「花桐」を立ち上げた功績は高く評価されよう。